W-2-2

「評価属性」をめぐって

岩男　考哲（神戸市外国語大学）

１．はじめに

叙述類型論では，属性，事象，指定等，様々な概念が提示され議論されてきたが（益岡編（2008），影山編（2012）），そうした中でもまだ十分に議論が行われていない概念に「評価属性（益岡 2012）」がある。以下の「すごい」や「ときたら」がそれを表すとされる。

(1)　あの選手はすごい／すごい選手だ。
(2)　そう思い返しているのに，ヴィヨンときたらけんけん吠え続けるのだ。

（益岡 2012）

→益岡（2012）において「評価属性」を表すとされた提題標識の「ときたら」を用いた文（益岡（2012）に倣って「トキタラ構文」と表記）を対象とし，考察を行う。

［本発表の構成］

2 節：「評価属性」という概念の概観と，その「評価属性」の表現手段の中でも特にトキタラ構文に関する先行研究の概観。
3 節：トキタラ構文の制約に注目し，その「評価属性」の内実について考察。
4 節：叙述類型論の観点からトキタラ構文について考察する場合，今後どういった発展の可能性が考えられるか。
5 節：本発表のまとめ。

２．トキタラ構文による「評価属性」概観

2.1　トキタラ構文の「評価」

・構文が「評価」的な意味を表すという指摘は，益岡（2012）以外にも存在する。

（岩男注：「ときたら」について）不満・非難・自嘲などの気持ちがこめられる

（森田・松木（1989： 53））

「ったら」類（「ったら」「ってば」「ときたら」「といったら」）は，人物や事態を主題として感慨をこめて提示し，それらに対する話し手の評価を述べるのに用いられる。

評価は批判的なものや，マイナスの評価であることが多く，文には話し手の嘆きや憤慨，あきれの気持ちなどがこめられていることが多い。（中略）批判やマイナス評価以外に，人物や事柄がもつすごさや程度のはなはだしさを述べるのに用いられることもある。

（日本語記述文法研究会編（2009： 241-242）．下線は岩男）

2.2　トキタラ構文の「評価属性」

・益岡（2012）

「評価属性」の叙述というのは次の（35）のような，対象に対する話し手の主体的・主観的な評価を表すものである。

（35）　あの選手はすごい／すごい選手だ。

益岡（2012:103.例文番号も益岡（2012）のもの）

そのような評価属性について，本節では，その叙述に特化した主題標識が専用的主題標識のなかに見出されるということを論じる。具体的には，「トキタラ」という主題標識がそれである。

益岡（2012:104）

→「評価属性」には，語レベルで表される（「すごい」）場合と文レベルで表される（「トキタラ」を用いた提題文）とが存在することを示唆。

なお，評価属性は既述のカテゴリー属性などと横並びの関係にあるものではなく，それらと共存する関係にある。例えば（35）の場合，当該の評価属性は単純所有属性・カテゴリー属性を兼ねるものである。

益岡（2012:104）

→「評価属性」は従来指摘のある属性（「カテゴリー属性」「性質属性」「習性属性」「履歴属性」等（益岡 2018））と横並び（同列）にあるわけではなく，他の叙述の類型と「共存」するという指摘。

※「ときたら」のような，（「は」と比べ）働きが限定的な形式を益岡（2012）は「専用的主題標識」と呼ぶ。

【本発表で考えたいこと】

（ア）　トキタラ構文の叙述は，叙述の類型上どう位置付けられるか？

（イ）　「評価」の「共存」と叙述類型論における他の概念との関りは？

３.「評価属性」と「共存」の内実

3.1　トキタラ構文における「評価」について

トキタラ構文は「評価」的な意味を表すとされている。このことは，益岡（2012）においても，特に事象を表す場合，「は」と置き換えるとその「評価」的意味が消失してしまうことによって確認されている。

(3)　トミー(は／ときたら)，うるさそうに手をふって追い払うような仕種をするんだ。

（益岡（2012）の例を一部改変したもの）

これまでの指摘と関連して，以下のような例の容認度からもトキタラ構文における「評価」の重要性が確認できる。

(4)　板垣（は／*ときたら），あそこで走ってるよ。
(5)　板垣（は／ときたら），この雨の中走ってるよ。
(6)　三野（は／*ときたら）香川出身の学生だ。
(7)　三野（は／ときたら）ふざけた学生だ。

〈容認度の低い例〉

(4) は話し手の観察した事象を評価等を交えずにそのまま述べた文。
(6) は，対象に内在すると捉えられる内在的属性の例。
（cf. *三野は（当時）香川出身の学生だった）
➔「評価」を意味する要素が文中に存在しないことが容認度を下げる要因になっていると考えられる。

〈容認度の高い例〉

(5) は評価の根拠となるような事態を述べて間接的に評価を導きやすくすることで容認度が上がっていると考えられる（※メトニミー的な推論）。
(7) では，「ふざけた」のように話し手の「評価」に相当する表現を生起させおり，容認度も高い。
→「発生した事態」「対象に内在する属性」を客観的に述べるだけでは容認度が低い。
話し手による対象に対する「評価」そのもの，あるいはそれを連想させる要素が存在しなければならない。

◎トキタラ構文による叙述のまとめ

叙述の内容	トキタラ構文
客観的な事象の叙述	×
（事象表現による）主題への間接的な評価	○
（属性表現による）主題への直接的な評価	○
対象の内在的な属性の叙述	×

「トキタラ構文」の叙述内容

3.2　「時空間的限定」と「評価」

これまでの考察を受けて，先に提示した（ア）と（イ）の問について考察。

(4)　板垣（は／*ときたら），あそこで走ってるよ。
(5)　板垣（は／ときたら），この雨の中走ってるよ。
(6)　三野（は／*ときたら）香川出身の学生だ。
(7)　三野（は／ときたら）ふざけた学生だ。

（ア）　トキタラ構文の叙述は，叙述の類型上どう位置付けられるか？
→非内在的な属性に留まると考えられる。

上記の例の中で「評価」を交えない文というのは，話し手から独立した，客観性の高い事態を述べている表現なのだと言える。そして，(6) のような対象に内在するものとして捉えられる属性をトキタラ構文が表せないということは，トキタラ構文が表す叙述は，属性の中では非内在的なものに留まると考えられる。

（イ）　「評価」の「共存」と叙述類型論における他の概念との関りは？
→内在的な属性と非内在的な属性や事象とを分ける重要な要因として指摘されてきた，「時間的・空間的な限定」と関りを持つと考えられる。

内在的な属性と非内在的な属性（あるいは事象）とを分ける 1 つの鍵とされてきた「時空間的限定」と，トキタラ構文の叙述内容を非内在的なものに留める「評価」との共通点は何かという問が浮上してくる。

時空間的な限定があるということは，当該の事態が個別的な（一般化されていない）存在であることを示しているのに対し，「評価」とは，話し手による個別的なものであることを含意する。共通点は「個別的である」という点にあると考える。

※寺村（1973）は，事象的な表現を述べる話し手のことを「描き手」，属性的な表現の話し手のことを「判断主体／判じ手」という語を用いて区別したが，仮にこの語句を使って表しわけるならば，時空間的な限定がある事態とは「描く」対象が個別のものであり，「評価」の対象となる事物とは「判断する」という行為が個別のものだと言い分けられるかもしれない（要検討）。

４．その他の現象

4.1　フランス語の再帰構文

春木（2012）：英語の中間構文との比較の後，フランス語の属性表現である再帰構文受動用法について，次のように述べている。

フランス語の再帰構文受動用法においては対象の内在的属性を述べるのではなく，

認知主体との関わりを通して何らかの一般化が表されている。

（春木 2012：57）

→対象の属性を述べる表現には，話し手との関わりに基づいたものを述べるものと，話し手との関わりからは切り離されて述べられるものとが存在することを示唆。

・岩男（2014）

トキタラ構文は事実的な事態が背景にあると成立することを指摘。

(8)　もし恩を仇で返したら，田中（は／*ときたら），最低な男だな。
(9)　恩を仇で返しやがった。田中（は／ときたら），最低な男だな。
(10)　もしこれを全部たいらげたら，あいつの食欲（は／*ときたら），底なしだな。
(11)　これを全部たいらげたのか！あいつの食欲（は／ときたら），底なしだな。

（岩男（2014））

→トキタラ構文の話し手は観察した事態に基づいた評価を述べている。事態との関わりを通して述べられている点で上記のフランス語再帰構文受動用法の特徴に類似。

4.2　「といったら」を用いた提題文

・日本語記述文法研究会編（2009）

「ときたら」と共に「といったら」も「ったら」類と呼ぶ主題標識の中にカテゴライズしている。

「ったら」類（「ったら」「ってば」「ときたら」「といったら」）は，人物や事態を主題として感慨をこめて提示し，それらに対する話し手の評価を述べるのに用いられる。

（日本語記述文法研究会編（2009：241-242））

→ただし，表せる叙述の類型はトキタラ構文と対照的。

(9)　神戸市外国語大学（は／といったら／*ときたら），唯一の公立外国語大学だ。
(10)　奴のすること（は／といったら／ときたら），何一つためになりゃしない。
(11)　瀬戸（は／*といったら／ときたら），この台風の中，俺を呼び出しやがった。

→「といったら」の方は，話し手の評価から切り離された一般的な事態が表現可能(9)。その一方で，間接的に評価を述べる，観察に基づいた表現（11）は表現が困難。

５．おわりに

［今後の課題］

・(5) のような文（「板垣ときたら，この雨の中走ってるよ」）の叙述の位置付け。
・形容詞等の語による評価と本発表で扱ったタイプの「評価」との関係の考察。

参考文献

岩男考哲（2009）「「ときたら」文をめぐってー有標の提題文が意味することー」『日本語文法』9-2，pp105-121，くろしお出版.

岩男考哲（2012）「「と言う」の条件形を用いた文の広がり」『日本語文法』12-2，pp.179-195，くろしお出版.

岩男考哲（2014）「「ときたら」構文の意味と主題ー提題文の体系化に向けてー」『日本語文法』14-2，pp.101-117，くろしお出版.

寺村秀夫（1973）「感情表現のシンタクス」『言語』2-2，pp.18-26，大修館書店.

日本語記述文法研究会編（2009）『現代日本語文法５』くろしお出版.

春木仁孝(2012)「英仏両言語における中間構文の違いについてー認知モードの観点からー」『時空と認知の言語学』Ⅰ,pp.49-58,大阪大学.

益岡隆志(1987)『命題の文法―日本語文法序説―』くろしお出版.

益岡隆志（2012）「属性叙述と主題標識」影山太郎（編）『属性叙述の世界』，pp.91-109，くろしお出版.

益岡隆志（2018）「日本語文論からの課題提起ー叙述類型論の事例ー」『Journal of Culture and Information Science』13(1,2)，pp.98-104，同志社大学.

益岡隆志編（2008）『叙述類型論』くろしお出版.

森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』アルク.

【付記】

今回の考察にあたって行った，伊藤創氏，木山直毅氏との議論が非常に有益でした。記して感謝申し上げます。